

母から学んだ思いやり

中 一

私の母は介護施設で働いている。母が私たち姉弟を育てるために、長く続けられる仕事として介護職についたのだ。

介護の学校に通っている間、教わる内容は、とても楽しいことであつたり、前向きな内容であつたりしたという。施設に就職した母は、学校では学べない本当の介護に向き合うことになり、楽しさだけではない、様々なことを学んでいるようだ。母の働く施設は、比較的、重度の病気の方や経管栄養とって鼻から管を入れたり、おなかに直接穴を開けて管から栄養を入れたりしながら生活をすすめる方々が多いそうだ。

母が仕事を始めてまもなく、男性の方が入居してこられた。入居されてすぐ、オムツから水のよくな便がたくさんもれてしまい、ズボンまで汚れてしまった。母は優しく声をかけながら、着がえとオムツ交換を始めた。するとその方は、涙を流し、

「申し訳ない、情けない。」

と小さな声をふりしぼっておっしゃった。母は、胸がしめつけられるような気持ちになったそうだ。それからしばらく便のときは、悲しそうな表情をされていたが、介護をするうちに、毎日の会話を通して笑顔が増えていったそうだ。そのことが母はとても嬉しいと言っていた。

年をとつても、男性は男性、女性は女性である。はずかしいと思うことは、なおさら人には見られたくないものだ。

介護は、相手の方がどんなに体が不自由で動けなかったとしても、人とのコミュニケーションが大切なのだと思つた。母は、「何かをしてあげる」のではなく「お手伝いさせて頂いている」気持ちを持ち続けたいと言っていた。

体を動かすことが難しくなつても、人として尊敬し、一つ一つの動作に思いやりをもたなければならぬ。また、病気による体の痛みで苦しんでいる方に対しては、薬だけではいやせない心のつらさもお話することや、手や体をさすることで、ほんの少しでも楽になるように心がけているという。そして、声をかけてもほとんど反応の見られ

ない方にも、働いている人は皆必ず声をかけ、窓の外の天気や楽しいニュースの話、ご家族が来られたときの話などをしていそうだ。それは特別なことではなく、必ず声が届いていると信じているから、普通に行われているということだ。

私は病気で体が動かなくなり、十数年も意識があることを気付いてもらえず、冷たい言葉や扱いをされていた人のことをテレビで観た。どんなにくやしく、悲しく、こわかっただろうと思いい涙が出た。だから母の話が本当に嬉しかった。

私たちを守るためのついた職業ではあるが、「本当にたくさん自分のためなところを気付かさなれたり、人生の勉強になつたりすることがたくさんある。ママは、あなたたちにも施設の人たちにも本当に感謝してるの。」

と、言っていた。すごく疲れた顔のときもある。心配になるときもある。楽しい話をたくさんしてくるが、きつと大変なこともたくさんあるのだからと思う。私も別の施設に見学やレクリエーションに行ったことがある。笑顔がいっぱいで介護の大変さやお年寄りの体のつらさは、そのときはわからなかった。でも、みんなが笑顔になるよ

うに思いやりをもって介護する人がいるのだと気付かされた。

そして、母が一番心に残っている話を初めて聞いた。とても小柄で、耳が遠く、ほとんどこちらからの声は聞こえなくなっているおばあちゃん。言葉もあまり発することはなかった。見た目かわいらしいので、敬語もなく話している人も多く、「かわいがられている」という感じだった。ある日、部屋で近くに寄って話をジェスチャーつきでしていると、ぎゅっと抱きしめ、母の背中をとんとんして、頭とほつぺたをなでた後、

「あなた、いい子ね。」

と、言ってくれた。仕事を始めたばかりで少し疲れていた母は、涙が出そうになったそうだ。そして、間もなくその方は亡くなった。背中をとんとんしてくれた手は、間違いなく、とても「大人」で、ほつぺたをなでてくれたその手は、とてもあたたかく大きく感じたそうだ。悲しいお別れもあるけれど、とても大切な思い出もたくさんもらっている、とこの話をしてくれた。

今年の母の誕生日に手紙を書いた。

「お母さん、いつもありがとう。大好き。」